

至心釈

一切群生海

以上の如き問いを出されたる聖人は、次の如く答へられた。

「答う。仏意測り難し。然りと雖も竊にこの心を推するに、一切群生海、無始より已来、乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。是を以て、如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も、清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心を以て、円融・無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心を以て、諸有一切煩惱・悪業邪智の群生海に回施したまへり。則ち是れ、利他の真心を彰すが故に、疑蓋雜わることなし。斯の至心は則ち是れ、至徳の尊号を其の体となせるなり。」

と。以上の文を拝読して、先ず感ずることは、この文は明らかに三心の中、至心を解釈せられたものであつて、特に聖人の領解の態度を窺うことが出来る。

即ち本願文の、

「設い我佛を得たらんに、十方衆生、至心に信樂して……」の願文を、表面的に受取る以上、至心は、衆生をして「真実に誠に」と仰せられるようである。然るに聖人は、「仏意はかり難し。然りと雖も」と先ず、無底の如来の大海に直面し、合掌して、凡智の計るべからざるを告白しつつも、「竊に斯の心を推するに……」と、一心の領解に沈み、限りなき如来の不行による大否定の世界に立ちて、その自照の世界を、告白せんとせられるのである。「推斯心」、推は「おす」である。斯心は、念佛の信心である。不行による絶対否定を表はして「この心を推するに」と云われたのである。不行の否定によらずして、どうして生死海の自照が可能であろう。即ち、この絶対否定の境においてのみ、「一切群生海、無始より已来、乃至、今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして、眞眞の心なし。」

との自証を獲ることが出来るのである。罪惡に穢れ(穢惡)、煩惱に汚れ染み(汚染)、虚仮にして諂偽(へつらい、いつわり)、清浄真実の心なし。かくの如く、聖人の自覚内観の天地においては、衆生海より、至心真実の文字が消え去ってしまったのである。

菩薩行

かくの如く、一切群生海より、至心を奪い去つた聖人は、眞實を如何に肯定しようとせられるのであるか。聖人は語をついで、

「是を以て、如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざること無し。真心ならざること無し。」

と、其処に、法蔵菩薩の不行の眞實を肯定せられた。誠に我等の自覚の世界に於いて、無清浄心、無眞実心を発見する限り、眞実にふれつつも、その眞実は、我ならぬものとしての、体験をおこさざるを得ない。貪欲、瞋恚、愚痴の三毒煩惱は、我等の内観深信の天地において、発見せられるものであり、本願の至心の文字も亦、無現するこ

とが出来ないとすれば、自然に至心は、唯、如来心の上のみ肯定せらるべきものとなる。即ち、至心、真実は、如来心の全てである。

「如来清浄の真心を以て、円融・無碍・不可思議・不可称・不可説の至徳を成就したまへり。」

至徳とは、名号であり、名号に内在する絶対功德である。如来の前行が、長時永劫の清浄真実によつて成就せられたることを明かされたものである。即ち、今や、至心をもつて完全に、名号それ自体の本質を表はせるものとせられたのである。菩薩は長時永劫に修行する。而して、その菩薩行のみ、至心であり得る。我等はここにも、真実の願は、唯、涅槃の内奥よりのみ起ることを想起せしめられる。涅槃は久遠の法身である。

「弥陀成仏のこのかたは今に十劫とときたれど塵點久遠劫よりもひさしき仏とみえたまう。」

(和讃)

「如来は実に、畢竟じて涅槃したまわず、是を菩薩と名づく。」(涅槃経)

涅槃より来生して、涅槃せざる菩薩行のみ、よく「真実」であり得るのである。この「無不清浄無不真心」長時永劫の菩薩行のみが、よく作佛することが出来るのである。

回施

しかも、この如来の本願が、衆生の穢悪汚染にして、清浄真実ならざる生死煩惱によつて発起したるものである限り、衆生心と、無関係なものではあり得ない。即ち、

「如来の至心を以て、諸有の一切煩惱・悪業・邪智の群生海に回施したまへり。則ち是れ利他の真心を彰す故に、疑蓋雑ること無し。」と、云はれる所以である。

至心、即ち真実は、必ず惜しみなく与えんとする心である。如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱悪業邪智の衆生海に回施したまうのである。真実は真実無き衆生海によつて生れ、それ故に、真実無き衆生海に、真実を廻向せんとするのである。即ち、至心とは、如来利他の真心を彰すものである。

この如来利他の真心が、衆生海に顕われて大信心となる。如来の真実をおいて外に、衆生の大信心はあり得ない。であるから信心には、疑蓋の雑る余地はないのである。

名号

然るに、我等の信は、如来の名号において外には領解することは出来ない。名号そのものが、至心でなくてはならない。即ち、

「この至心は、則ち是れ、至徳の尊号を其の体と為せるなり。」

至徳の尊号とは、佛の名号である。名号そのものが至心である。至心の体を押へて言えば、南無阿弥陀仏そのものであつた。

我等はここに、聖人によつて、不可思議なる信の態度を学んだものである。即ち、如来は、十方衆生に至心を求めたまうものの如くである。然るに、至心は却つて如来心そのものであつた。この名号の至心にふれるが故に、

「一切群生海、無始より已来、乃至、今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし。虚仮諂偽にして眞實の心なし。」

と、諦観せざるを得ないのである。我等をして、生死煩惱を内観せしめるものは、この如来の至心によるが故である。如来の眞實が廻向顕現するのでなくて、いかでか、十悪五逆、穢悪汚染の自照があろう。これ全く如来眞實の大否定、全否定によるが故である。

而して、この内的否定によつて罪業を深信する限り、眞實は、我のものではなくて、我ならぬ如来のものであるとの、信を發起せしめられるのである。しかも、かかる如来の至心は、具体的には、名号そのものの体であつて、我等をはなれたものではない。眞實は、個々の衆生の所有でなくて、普遍のものである。眞實を、我の独占の如く考へ、我のみ眞實なりと信ずるが如きは、微塵も眞實なき衆生の僞慢である。

しかも、かかる普遍の生命は、個々の中に顕現して、個をして不偏の相をとらしめるのである。眞實は如来のものである限り、群生海に永劫に廻施せられなければならない。我等は聖人によつて千古の疑團を氷解せられたのである。

至心

以上、如来の本願に、十方衆生よ、至心に信樂して、と誓われた至心について、述べてきたのである。

即ち、至心とは、眞實、誠の心であるが、聖人の領解を通せば、衆生に眞實たれと求めたまうのでなくて、如来心そのものが至心眞實そのものであつた。衆生にむかつて招喚し、廻向します如来心そのものが、一点濁りなき清浄眞實であつた。然るに我等の信の世界においては、具性的には、名号を聞信するより外にはあり得ないが、至心は実に南無阿弥陀佛の名号を、その体とするのであつた。即ち、南無阿弥陀仏そのものが、至心であつたのである。而して、如来が至心であればあるだけ、一切群生海は、眞實ならぬ、煩惱悪業、邪智、穢悪汚染、虚仮諂偽に満てるものであつた。かかる如来の眞實は、眞實ならぬ衆生海によつて生まれ、それ故に、眞實なる信を回向成就せんとするのが、如来利他の眞心であつた

自覚内観の天地において、眞實を見失える我らは、やがて、至純なる眞實を、名号の内容として頂戴するのである。聖人は今や、かかる不可思議なる他力廻向の世界を、教証において発見せんとせられるのである。

菩薩の勝行

先ず聖人は、教文証の最初に、大無量壽經の勝行段の文を引かれるのである。云うまでもなく、勝行段とは、因位、法蔵菩薩の兆載永劫の修行を説ける文である。曰く、「是を以て、『大經』に言はく、(不可思議兆載永劫に於いて、菩薩の無量の徳行を積植し、) 欲覺、瞋覺・害覺を生ぜず、欲想・瞋想・害想を起さず、色・声・香・味・

觸・法に著せず。忍力成就して、衆苦を計らず、少欲知足にして、染・恚・痴なく、三昧常寂にして智慧無碍なり。虚偽詔曲の心あること無し。和願愛語にして意を先にして承問す。勇猛精進にして志願倦むこと無し、専ら清白の法を求めて、以て群生を恵利しき。三宝を恭敬し、師長に奉事しき。大莊嚴を以て衆行を具足して、諸の衆生をして、功德成就せ令むとのたまへり……」

と。以上の文は、勝行段中、菩薩の意業、並に身業を説ける文である。手間取りはしても先ず、この文について味わって行かう。

欲と願

「欲覚、瞋覚、害覚を生ぜず、欲想、瞋想、害想を起さず……」

貪欲と瞋恚と、瞋恚からおこる害心と、こうした想も、覚（かんがえ）も起さない。これが法蔵の意である。

蓋し、衆生心は、欲心より外になきものである。貪欲の満されざる時は、瞋恚となり、やがて他を傷害しようとする想となり、意志となるのである。かかる貪・瞋・害の三毒の煩惱より外に、何ものをも持たぬ者が衆生である。然るに菩薩は、かかる貪欲、瞋恚、悩害の想も、覚悟もおこさず、生ぜず、と説かれてある。憶うに「起さず、生ぜず」と表現された世界こそ、菩薩の世界ではあるまいか。

唯、単に貪欲のみなる衆生心の煩惱にも、起さず生ぜずの願は、おこり得ないし、又、涅槃界の清浄真実なる如来にも亦、生ぜず起さずの願は不必要である。貪欲のみなれば、かかる意志はないと共に、また貪欲なき処にも、生ぜず起さずの願はあり得ない。誠に、菩薩精神とは、現実生死界にはたらく如来心である。真如界より還来し、従果向因せる如来大悲は、衆生の煩惱業苦を、直ちに如来自らの、大悲の内容とし給うが故に、起さず、生ぜずとの願行に生きたまうのである。

久遠の真実は、仮令、生死煩惱の現実に来現すとも、微塵もそれに染まないものであると共に、煩惱なくしては、それが大悲の願とはならない。貪欲自体を直ちに否定しても、起さず、生ぜざる願の動く処に、道は開くのである。欲は願ではなく願は欲ではない。然し、欲なき処に願は無いし、願の無い処に欲は発見せられない。欲が、大悲の智慧光によつて揚棄せられてのみ、願は誕生するのである。願は徹頭徹尾、他力である。

「色、声、香、味、觸、法に著せず。」

眼に色を、耳に声を、鼻に香りを、舌に味を、身に觸（感覚）を、意に法を受け入れて、其処に六識六塵の煩惱を起し、それらの境に執著するのが衆生心である。法蔵菩薩は、「色、声、香、味、觸、法に著せず。」と云はれる。これ三毒を遠離し給う、無我の大悲の必然の相である。衆生はこれらの六境、六根に執著して、我執我欲のみ、生命とするものである。如来の智慧光は、かかる衆生を内に照破し否定して、執着を執着として深信せしめる。我等はかかる念佛の天地においてのみ、菩薩の「色、声、香、味、觸、法に著せず。」との、願行の意を窺うことが出来るのである。

自利利他

「忍力成就して衆苦を計らず。少欲知足にして染患癡なし。三昧常寂にして智慧無碍なり。」

蓋し、忍力成就は、生活の成就である。業苦にあつてこれに勝ち、至心精進の無上道を志求し、行歩するのには、忍力成就する外にあり得ない。「我行精進 忍終不悔」とは、菩薩精神そのものである。至心の真実は生死界にあつては、忍力成就して衆苦を衆苦として計らず、無量の徳行を積植するのである。少欲にして足るを知り、貪欲、瞋恚、愚痴を超え、禪定三昧の聖座に、常に寂靜の安住をつづけ、智慧は一切に無碍にして、虚偽謡曲の心など微塵もなく、顔を和げ、慈悲の語を使い給い、衆生の心を承けこんで、求めざるに与え、勇猛精進にして倦まずたゆまず、専ら清浄の自法を求めて、以て、一切群生を利益し恵み給うのである。

以上の説は、如来の至心が大地に実現せられる姿として、至心とは、全く如来心なることを示したまいし文である。まことに真実とは、自利他成就したもう如来心である。しかもその真実は、三毒煩惱の中に廻向顕現しなくてはならない。我等は、かかる信境において、如来、長時永劫の修行を聞いて静かに、その大悲に同感するものである。

全てこれ至心

猶、続いて聖人は、無量壽如来会の経文を引き給うてある。大経と大同小異ではあるが、特に注意を引くのは、

「種々の功德、具足して、威徳廣大清浄佛土を莊嚴せり。……世間を利益して大願円満したまへり。」

等の文である。清浄の佛土も畢竟、如来の至心真実を体として、莊嚴せられるのである。

更に続いて聖人は、光明寺善導大師の散善義の文を引いて、凡夫雑毒の善を浄土に廻向して生れんとすることの不可を明かし、菩薩、永劫の真実心中に作したまへる本願によつてのみ、往生すべきことを説き、遂に、御自釈を出された。

「爾れは、大聖の真言、宗師の釈義、信に知んぬ。斯の心則ち是れ不可思議・不可称・不可説の一乘大智願海、廻向利益他之真実心なり。是を至心と名づく。」

と。これ即ち至心とは、本願海他力廻向の真実心であるとの断定である。誠に浄土の莊嚴も、浄土からの廻向成就も、やがて衆生の救済も、悉く、至心によつて成就するのである。

真実即如来

聖人は、更に涅槃経の文を引いて、以上の断定の教証とせられた。

「既に真実と言へり。真実と言うは、『涅槃経』に言はく、実諦は一道清浄にして、二つ有ること無きなり。真実と言うは、即ち是れ如来なり。如来は即ち是れ真実なり。

真実は即ち是れ虚空なり。虚空は即ち是れ真実なり。真実は即ち是れ佛性なり。佛性は即ち是れ真実なり、と。」

実諦とは佛性のことであり、如来真実の本願のことである。「実諦は、一道清浄にして二つあることなきなり。」とは、如来本願の真実のみが、二つなき信実である。実諦であるとの意である。特に意にとどむべきは、

「真実と言うは即ち是れ如来なり。如来は即ち是れ真実なり。」

との聖言である。聖人にあつては、この経文の如く、真実とは如来より外に、無かつたのである。真実とは、虚空の如き常住不変の如来である。真実とは仏性そのものであつた。かくて至心、真実とは如来心の全てであつた。至心積をおわる。